

## 『科学者は変わるか』を読んで

河野, 洋人  
東京工業大学 : 博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/2543939>

---

出版情報 : 「吉岡斉の仕事を考える」研究会報告書, 2019-01-20. 「吉岡斉の仕事を考える会」実行委員会  
バージョン :  
権利関係 :

## 『科学者は変わるか』を読んで

東京工業大学博士課程 河野洋人

8年前、私は理学部物理学科の一学生だった<sup>1</sup>。専門課程へ進学した当初は究極理論への憧れから素粒子理論を志していたが、あれこれ悩んだ結果、多体系を扱う方が楽しそうだと考えるに至り、4月からの理論演習(4年生の研究室配属に相当する)では原子核理論に進もう、と心を決めていた。

その矢先、東日本大震災が起こった。とくに福島第一原発事故は、私に、幾つもの問いを突きつけた——この惨事は、これからまさしく身を投げようとしていた学術的探究の、一つの帰結であるのだろうか。だとすれば、科学者になろうとすること自体、考え直さなければならないのかもしれない。いや、しかし、科学者を志ざし、専門知識を有しているからこそできることも、なにかあるかもしれない——だが現実には、理論の座学のほか学生実験で鉛ブロックを一度や二度扱った程度の経験しか持ちあわせない学生がいくら背伸びをしたとて、日に日に深刻さを増す原発の状況について言えることなど、皆無に等しかった。実際のところ、報道から得た断片的な情報からだけでは、そもそもほとんど何も言いようがない。しかし、意見を求められてそのように答えるとき、友人からの反応は、言外に非難のニュアンスを帯びているように感じられた——いや、だがしかし、そもそも自分がいったい何をしたいのだろうか。この事故の責任の一端が、自分にあるとでもいうのだろうか。いや、科学者になろうとする以上、無関係を言い立てるのは不誠実のようにも思える。それにもしかすると、注意深く考えれば、本当に無関係ではないのかもしれない——これらの多くは手垢のついた問いであり、ナイーブでさえある。しかし、科学者への道をまさに歩みはじめようとしながら、それまでこうした視角を持つことのなかった未熟な一学生にとっては、十分に深刻であった。

休学をはさみ、なんとか折り合いをつけて大学院へと進学した(分野は物性物理学に変えた)。幸いなことに、大学院に副専攻として設置されていた「科学技術インタープリター養成プログラム」<sup>2</sup>で、科学史・技術史、科学哲学、科学技術社会論等を勉強することができた。近しい問題意識を有する多くの友人とも出会うことができ、上記のような問いにも、幾つかの角度から向き合う機会を得た。

私が『科学者は変わるか』(以下、本書)に出会ったのは、このプログラムの一貫で受講した科学史の授業である。

もし科学者が、科学知識の生産機構の部品、つまり役割人間であるとすれば、彼は自己点検に向かう契機をまったく持たない。役割人間からはずれたところにある、科学者の人間性だけが、社会的責任の思想を発展させていくための、よりどころなのである<sup>3</sup>——こういった吉岡の言葉に、胸を衝かれた<sup>4</sup>。本書に描かれている、科学と社会の問題に悩む科学者の苦闘の軌跡には、多分に励まされた。また、歴史、あるいは過去の思想家から、現在の状況を理解し変革しうる知見をおそれず汲みつくそうとする吉岡のスタイルは極めて印象的だった。その後私は物理学を辞めて科学史に転向したが、本書との出会い

<sup>1</sup> 私ごとからはじめることをお許しいただきたい。私はそもそも、吉岡斉の仕事についてこうした場で何かお話ができるほど吉岡のなしたことに明るくはないし、また吉岡の取り組んだ問題領域についての専門性も、残念ながら、まだ、有しているとは言い難い。しかし、吉岡を知らない学生にとって一つの参考となるように、一学生が吉岡から受けた影響を軸としてお話しする、ということで今回の講演をお引き受けした。そこで、まず私ごとからはじめる次第である。

<sup>2</sup> 東京大学科学技術インタープリター養成プログラム (<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp>)。

<sup>3</sup> 吉岡斉『科学者は変わるか——科学と社会の思想史』(社会思想社、1984)、34頁。以下、本稿では、同書からの引用は本文内で(p. 34)のように括弧付きで示す。

<sup>4</sup> しかしいま考えると、これを一つのメッセージとして捉えるのは、やや曲解であったかもしれない。

は、その一つの重要な契機となった<sup>5</sup>。

さて、本書は「科学と社会の接点において発生する問題群の深刻さに気づき、それをいかに解決するかについて、深いところから考えようとしてきた科学者の思想がどのようなものであったかを明らかにし、それを時代背景との関わりで考察し、さらにその意義と限界を現代的視点から評価する」(p. 2)というものである。あとがきによれば、本書の土台は、『日本読書新聞』に30回にわたって連載された「科学者は変わるか——七〇年代日本の科学者運動」(1979年10月15日号から1980年5月26日号)である。吉岡が総合雑誌にはじめて寄稿した論文「科学批判の十年——廣重徹から高木仁三郎へ」(『第三文明』、1979年8月号所収)に同新聞編集部が興味を持ち、この連載を勧めたという。廣重徹の『戦後日本の科学運動』(中央公論社、1960)以降、科学と社会をめぐる思想と運動についての整理分析がなされていないことに不満を感じていたという吉岡は、この勧めに従って自らその作業に取り組むこととなった。連載終了から程なくして単行本化が決まり、吉岡にとっての処女作となるはずであったが「執筆はいっこうにはかどらず」(p. 284)、予定よりも約3年遅れて1984年7月の出版となった<sup>6</sup>。この間に大幅な改稿作業が行われ、吉岡は本書について「完全な書き下ろしである」とさえ述べている。執筆時期から見ても、またその内容からいっても、本書は『テクノトピアをこえて——科学技術立国批判』(社会評論社、1982)に象徴される同時代的な科学批判と、『科学社会学の構想——ハイサイエンス批判』(リポート、1986)『科学革命の政治学——科学からみた現代史』(中央公論社、1987)に象徴される明確な理論志向とのほさまに位置する、過渡期の作品と位置づけられよう。

本書では、科学者(組織を含む)の思想を取り出してその構造を分析する、というスタイルが貫かれている。取りあげられるのはJ. D. バナール、民主主義科学者協会(以下、民科と略する)、小倉金之助、坂田昌一、武谷三男、仁科芳雄、J. R. オッペンハイマー、朝永振一郎、廣重徹、全共闘運動、梅林宏道、柴谷篤弘、高木仁三郎である。彼らの主張や実践に即して、科学者の社会的責任、科学の中立性、研究聖域論、科学主義、ラボラトリー・デモクラシー、科学者の“原罪説”、科学の“体制化”、などといった概念、思想、試みの分析が講じられるが、それらの功罪までもが厳しく検討されている、というのが本書の大きな特徴である。こうしたアプローチについて吉岡は「本書では、そうした[当時の思想・社会状況との関わりにおいて個々の思想を描く]歴史に忠実な再構成の作業を、必要最小限にとどめたい。むしろ、さまざまの思想の論理の組み立て方を解剖し、そうした論理が、現実に進められている科学を理解するうえで、どういう長所と短所を持っているかを解明する作業のほうを、私は重視したい」(p. 2)、「私は歴史を裁断しているのでは決してなく、科学と社会に関する種々の理論を、裁断しているのである。」(p. 3)と述べている。

以下では、本書の流れに沿いながら吉岡の分析を紹介する<sup>7</sup>とともに、その手つきから、吉岡自身の科学批判に対する構えを少々検討したい——これは、科学を志す一学生だった私が、前述の動機によって本書から読み取ろうとしたところのものでもある。この観点から見れば、本書の山場は、吉岡が私淑していたとみられる二人の思想家——廣重徹と高木仁三郎——の分析にあるといえよう。前者には一つの

<sup>5</sup> ただし、生前の吉岡先生をお見かけしたのは片手で数えられる程度しかなく、直接言葉を交わすことができたのはただ一度きりだった。

<sup>6</sup> 本書の半年後に企画のはじまった『テクノトピアをこえて——科学技術立国批判』(社会評論社、1982)が、「一足先に世に出ることとなってしまった」(p. 284)。

<sup>7</sup> 特に前半部はやや平坦な要約になってしまうことをお許しいただきたい。吉岡が思想を分析する手つきに親しみのない方に、ここでの記述から、その雰囲気を感じていただければと考えている。

章(第5章)が、後者には結びの節(第6章第10節)が当てられている。ここでの筆致からは、(当時の)吉岡が科学批判の思想と実践をどのように捉え、その布置のなかで自らの軸足をどこに定めようとしていたかを、窺い知ることができる。

さて、吉岡はまず「科学者の社会的責任」の概念の分析からはじめている。第1章では、科学労働者組合の綱領や世界科学労働者連盟の「科学者憲章」(1948年)の分析から、この概念には科学の維持と発展に対する責任と、科学の社会的利用における乱用や悪用を防ぐために専門家として適切な勧告や助言をすすんで提供する責任の二つが併存しており、現代的にはもっぱら後者の意味で用いられている、と整理する。同時に、この思想が科学者の地位向上運動に資するものとして出発したことも強調している——すなわち、この概念にはもとより科学者の罪の意識などは反映されておらず、しばしば併せて語られる人類全体への貢献とのレトリックも、実質的な意味を持たないものである、と指摘する。

さらに吉岡は、この責任の担い手について議論を進める。社会的責任を果たす制度的基盤が存在せず、その試みが科学者個人の自由意志によって担われてきたことを指摘した上で、「社会的責任を果たすために努力するのは尊い。しかし努力は免罪符にならない。科学者にはたして社会的責任をとる能力がそなわっているのか、ということは真剣に問われねばならない」(p. 36)と厳しく論じている。一方で、科学的営為と社会との間の緊張関係という主題を突き詰めていくことによって、既存の職業科学者の仕事様式を変革する契機を持つ思想でもあるとして、これをダイナミックに捉えねばならない、ともしている。

続く第2章と第3章で吉岡は、科学主義<sup>9</sup>の思想の分析へと進む。ここで主として取り上げられるのは、J. D. バナール、民科(特にその“国民的科学”)、小倉金之助、坂田昌一、武谷三男である。

まず、科学と社会の問題という領域においてトップクラスの影響力を誇った思想家として、バナールが登場する。科学は社会発展の主要な動因であり社会主義は科学の進歩がもたらす必然的帰結である、全てが科学に基づいてコントロールされる社会が実現し、そこで人間も科学も完全な“自由”が獲得される、とバナールの基本的見解をまとめたうえで吉岡は、社会主義のもとで科学が最も急速に進歩するという前提が現実によって反証されたいま、バナール主義は裸の科学主義へと変質せざるを得ない、と指摘する。実際、世界的な高度経済成長の時代が到来したとき、バナール主義は反体制の思想ではなくなってテクノクラシーの基礎理論となった。バナールが果たした歴史的役割は認めつつも、バナールの科学思想の最も根本的なところは、今日ではもはや顧みられず、「現代人はもはやバナールを乗り越える必要はない」と告げる。

ついで吉岡は、日本における科学主義思想の分析へと移る。敗戦を境として、科学立国を旗印として科学振興を訴える科学者たちの姿勢に変化が見られなかった——高度国防国家から高度文化国家へ——ことを指摘したのち、民主主義を口先で唱えるのではなく、現実のものとするために行動を起こした科学者の代表的組織として民科を挙げ、その盛衰を描いている。吉岡は、民族独立のための武力闘争という共産党の方針を差し引いて考えれば、民科の掲げた“国民的科学”の思想は、人民のための科学——人民の生活が脅威にさらされている状況において、生活破壊から自らを守ろうとする人民の運動のなかに科学者が入り込み、専門知識によって運動に奉仕する——の理念を模範的に定式化した思想であると評価する。またこの運動が、共産党の革命路線の一環としてではあるが、全共闘運動と共通するような反

<sup>9</sup> 「科学主義」には様々なバリエーションがあるが、ここでは、吉岡の用法に従い、「科学的方法を世界のあらゆる事象[自然科学以外の分野を含む]を理解するための至上の方法とみなすこと」(p. 40)を基本的前提とする思想を指す。

アカデミズムを有していたことに着目し、この必然的帰結である反アカデミズムと職業的利害とのディレンマを強引に糊塗しようとしたところに民科の錯誤があった、と分析している。

科学史家・小倉金之助については、唯物史観科学史を創始した人物として導入がなされている。吉岡は、唯物史観科学史の先入見——歴史の進歩を担ってきたのは過去においてはブルジョア階級であり、現在では労働者階級であるはずだ——が底の浅いワンパターンの歴史記述しか生まなかった、と指摘したうえで、「科学の党派性について考えるための出発点を与えたことだけは、どんなに評価しても褒めすぎではない」(pp. 85-86)としている<sup>10</sup>。しかしながら、民主主義こそが科学の発展のための基本的条件である(吉岡はこのテーゼを「科学的民主主義」と名付ける)という小倉が終生抱いた命題に対し、吉岡は手厳しい。「科学的民主主義は、民衆が社会のあらゆる事柄に決定権を持つという本来の意味での民主主義の建設に逆行する役割をも果たした。というのは科学的民主主義の思想は、科学者は本来民衆とともにある(あるいは民衆そのものである)という先入見に立つがゆえに、かえって民衆の科学とは何かについて考える道を閉ざす思想だからである」(p. 95)。

続いて物理学者・坂田昌一が、科学主義の思想家として取り上げられる。坂田は“ラボラトリー・デモクラシー”の名のもとに科学界の民主化を推し進めたが、ここには非科学者に科学に関わる事柄について発言権を与える方向に民主主義を拡張していく発想がまったく見られない、と吉岡は指摘する。この原因について吉岡は、科学と民主主義とを同一視する科学的民主主義のイデオロギーの作用を挙げている。

第3章の結びでは、武谷三男が取り上げられる。吉岡は、武谷の科学思想の最大のキーワードが“有効性”であると指摘したうえで、武谷の基本姿勢を、科学的精神——論理的でストラテジックな精神——がどれだけ貫かれているかによって全ての言論を採点しようとするものである、と批判的に論ずる。この思考態度によれば、現存する科学の問題は全て科学的精神の不足に起因するということとなり、「社会のなかのダイナミックスの解明を素通りして、科学的精神という決して誤るはずのない“正義の立場”によって現実を裁断する」(p. 113)のものであると指摘する。こうした態度は根本的に再考されねばならないとしながら、「科学思想をまこと思想と呼ぶに値するスケールの大きなものへと押し上げたこと。それによって多くの若者を魅了し、科学思想の一層の発展を準備したこと。そこに武谷理論の歴史的意義がある」(p. 125)としている。

第4章で吉岡は、核兵器と科学者の関係について、「科学者は原子爆弾によって罪を知った」とする言説を中心に検討している。日本の原子爆弾開発において科学者らは、専門分野の存続のためという政治的打算にもとづき、軍事研究に従事することであわよくば科学的意義のある成果を生み出そう、という行動様式を有していたことを指摘する。さらに、戦中に“東亜共栄圏”の建設に資するとして純粋科学を推進しようとした物理学者・仁科芳雄が、敗戦後、日本再建のための“真に救国の具”として科学を推進したことをとりあげ、ここに、科学の進歩に精魂を傾ければ社会に貢献できる、という考えが一貫して保持されていることを指摘している。

つづいて吉岡は米国における原爆開発の検討に進む。まず、マンハッタン計画において多くの科学者は当然の義務として科学動員のプロジェクトに従ったのであり、反ファシズムの動機や日本への原爆投下への反対などは、ごく一部の周辺的エピソードでしかなかったと指摘する。またそもそも、科学者の

<sup>10</sup> 「党派性」については、「その科学の生産機構または流通機構の仕組みが、特定の社会集団の利害・価値に適合し、他と不適合を生ずること」(p. 84)と定義が与えられている。

責任を、動機やアリバイなどといった個人の主体的姿勢に関わる次元の事柄に解消することはできない、と厳しく断じている。さらに原子兵器研究所所長であったオッペンハイマーが戦後、物理学者は罪を知ったと述懐したことに触れ、この言は大量殺戮の責任にてらして科学者は裁かれるべきである、ということの意味したのではないと指摘する。すなわち、ここでの罪とは、人間が人間なるがゆえに負っている宿命的な原罪を指していた、と分析している。この原罪説が科学の価値への盲目的コミットメントと矛盾しないことを指摘して吉岡は、「[原罪説からは]科学者の社会的責任について、いかなる具体的指針も出てこない。オッペンハイマーが、すべてを限りなく曖昧な表現のかなたに包み込んでしまった、という[米国政治学者]ハーベラーの表現は、まことに正鵠を射ている」(p. 150)と述べている。

この“科学者の原罪説”をさらに発展させた人物として、物理学者・朝永振一郎が挙げられている。朝永が原罪説に基づき、現代科学が累積的進歩という性質を持つことが核軍拡競争の前提条件になっていることを指摘したことについて、吉岡は「現代科学のどこに、罪の源泉がひそんでいるのか、について朝永は一つの重要なポイントを押さえた議論を展開することに成功した、と言ってよい」(p. 179)と一定の評価を与えている。

続いて吉岡は、第5章全体を科学史家・廣重徹の分析にあてている。廣重は、科学の“体制化”<sup>11</sup>という概念を提示したことで知られる科学史家である。吉岡はまず廣重を、科学的民主主義思想に「まさに全身全霊を傾けて挑戦した」(p. 181)思想家として紹介する。体制化という概念を提唱することで廣重は、科学が——科学的民主主義が期待するように——革新の陣営にあるのではなく、むしろ既成秩序を維持するための保守の陣営に貢献していることを力説した、としているのである。「廣重は、科学的民主主義が、制度的にも知的にも飼いならされた現実の科学にたいする有効な批判の武器たりえず、逆に権力への迎合を容認する論理構造をもつのに我慢がならなかったのである」(p. 204)とみている。

さて、吉岡は、“体制化”の概念を含む廣重の社会史における仕事が、戦後日本の科学についての特殊主義を否定し普遍主義への転換をはかったものであるとして、「史観の基本を変えるほどのインパクトを与えるプログラム」(p. 218)であったと高く評価している。しかし一方、廣重のいう“体制”が、独占資本主義というシステムそのものを指すか、あるいは独占資本主義の政治経済機構において権力を掌握するエスタブリッシュメント(支配階級)を指すのか、という問いを立てたとき、廣重の体制化概念がある硬直性を宿してしまっていることがわかる、とする。すなわち、後者の見方を採ると、科学の体制化とは、支配階級から我々の手に科学を奪いかえせといったスローガンさえ掲げればそれ以上の議論が不要となる思想になってしまい、吉岡は、廣重自身もこうした陥穽にはまっているとする。

この点において吉岡は、廣重が「科学の体制化を歴史的事実として指摘しながらも、そのどこが悪かを原理的なレベルで解き明かすことを怠った」(p. 193)、と厳しく断じている。すなわち廣重が、独占資本主義という政治経済システムと民主とはなぜ互いに対立せねばならないのか、民衆にとって好ましいシステムとはどのようなものか、といった問いに分析的に答えようとすることをしなかった、と指摘しているのである。この理由として吉岡は、廣重が社会主義への幻想と訣別しながらもなお、マルクス主義的な階級闘争の図式を暗黙のうちに引きずっていたからである、とする。すなわち、廣重が依拠した即物的な体制概念が、マルクス主義的な階級闘争の図式と切っても切れない関係にあるというのであ

<sup>11</sup> 「体制化とは、科学が現存する社会秩序を維持するための不可欠の要素となり、その結果として、この社会秩序のなかに科学の維持発展のための制度的装置がそなえられ、この社会秩序とはなれてはもはや存在し得ないものとなったことを指している」(廣重徹『近代科学再考』(朝日新聞社、1979)、58頁)。

る。そして吉岡は、こうした視点を超えない限り、廣重がアンチテーゼとして掲げた“人民的コントロール”のスローガンは、支配階級の専横による科学の乱用を民衆がチェックしなければならない、というごくありきたりの主張を言い換えただけのものとなり、現代科学の変革のビジョンと呼ぶに値しなくなる、という評価を下す。科学の体制化についての周到な分類学を確立することではじめて、現実を分析するために有効な概念となるのだ、と吉岡は主張する。

ただ吉岡は、廣重の狙いは、科学は本来社会進歩の担い手であるはずだという考えを覆して職能的な科学者運動に破産宣告を下すことにあったため、上記のようなビジョンの不在をもって廣重を責めるのではないものねだりである、ともしている。とはいえ、ここでの吉岡の廣重に対する批判の筆致には、憤りさえ感じられる。吉岡が廣重に寄せていた期待をうかがい知ることができる。

実のところ、吉岡は、廣重から受けた影響について公言して憚らない。あとがきでは、「科学と社会について何か議論しようとする際、つねに広重の残した仕事を念頭に置かずにはおれない習性を、私が身につけてしまっている」(p. 285)と認めている。また、科学運動についての分析という面で、本書は廣重の『戦後日本の科学運動』と軌を一にしている。実際吉岡は、執筆に際しモデルとして同書を念頭に置いたと述べている。ただし執筆の過程で、廣重と自らの違いに気づくこととなったようだ。「広重を乗り越えようとか、その続編を書こうとかいう意気込みは、時が経つについて弱まっていった。そもそも広重と私とでは、科学と社会の問題へのアプローチの仕方が、かなり異なっているから、共通の土俵で張り合うことは不可能なのだ、ということに気がついたのである」(p. 285)。

吉岡はここで、廣重のアプローチと自身のそれとを対比させている。「やや図式的に整理すれば、広重のアプローチは、現代日本の社会体制のなかでの科学者運動のダイナミクスを捉え、そのあるべき姿を探求する手がかりにするというものである。いっぽう私のアプローチは、科学社会学の立場から、科学と社会についての思想の論理構造と、そこにはらまれる問題点を明らかにしようとするものである。歴史的よりも理論的、実践者よりも傍観者、という傾向が強く出ていることは否定できない。だから本書は、広重の続編ではない」(p. 285)。

ただ私にとっては、廣重と吉岡の違いよりも、共通項の方が重要である。本書での吉岡のスタイルは思想史の装いを基調としているが、講じられている分析はすべて、一つの目的に向けられている——吉岡のいう「科学社会学」の構想である。これは「現代科学の社会学的方向づけのメカニズムの実態」(p. 287)を理解するための枠組みである。ここまで紹介してきた議論からもわかる通り、吉岡の分析の一つの特徴は、問題を隠蔽し、なされるべきであった議論への道を閉ざした思想の告発、というスタイルにある。それはたとえば、坂田にとっての科学的民主主義であり、武谷の科学的精神であり、オープンハイマーの科学の原罪説であり、何より廣重におけるマルクス主義的な階級闘争の図式の残渣である。これらが振りはらわれたところに予感されていた議論が、吉岡の科学社会学の内容である。こうしたものを構想すること自体、やはり一つの科学批判の試みであろうし、「実践者よりも傍観者」というのは、スペクトルの表現でしかないだろう。

とはいえ、この違い——「実践者」か「傍観者」か——は、吉岡にとって重大な意味を持っていたようだ。たとえば、民科の活動を描くにあたり、吉岡は述べる。「私はできる限り固有名詞のつく科学者運動にたいして価値判断を下すことを慎みたいと考えている。その理由は私がそうした過去の運動に参加せず、またそれを継承しようとする運動に加わっているわけでもない、ということに尽きる。運動を進め挫折した人々の内面的葛藤を見事に描きおおせるほど私は優しくはない」(p. 66)。科学批判の実践

を描くにあたり、吉岡の筆はつねに慎重である。こうした実践へのまなざしは、第6章で1960年代末以降の日本の科学運動が描かれる際に、その具体的内容をより明らかにする。本文の議論に戻ろう。

第6章は、全共闘運動の分析からはじまる。吉岡は、全共闘運動の提起した自己否定の徹底という流儀が、科学の党派性をどこまでも徹底して摘発する可能性を含んでいたと指摘し、それを「全共闘運動の時代を超えた不変性である」(p. 236)と評している。つづいて、この思想のエッセンスを、現代科学の党派性を徹底的に追求していくという志向性において最もストレートに継承した組織として、梅林宏道、山口幸夫、高木仁三郎らを擁した「ぷろじえ」同人を取り上げている。このグループの活動について吉岡は、現代科学は非人間的であり、そこでは科学者の人格と職能とが二元論的に分断されているという共通認識のもと、“いかにして人間解放の科学を築いていくか”という問いに取り組んだ、とまとめている。

さて、科学批判の実践についての吉岡の見解は、梅林と比較しつつ高木を論じた箇所によく表れているように思われる。まず吉岡は、実証主義批判を旨とした梅林の科学批判の基本図式を、ディレンマの理論であると形容する。これは、実証主義の部分性と人間存在の全体性との間のディレンマを、科学技術的实践の場面でどう解くか、ということを中心とする理論だとされる。これに対置する形で吉岡は、大学を辞して反原発運動に飛び込んだ高木の図式を、トリレンマの理論であるとする。トリレンマとは、科学技術の論理、政治経済の論理、人間(住民・市民)の論理の三極構造がおりなす矛盾である。ただしこの構図は高木も自覚していたものであり、高木は、科学者が実験着、背広、普段着の使い分けを余儀無くされる、と述べている。この比喻を援用しながら吉岡は、高木の立場を解説する。「反体制の立場をとる高木にとって、背広はみずから身につけるものではないが、政治経済の論理をふりかざす背広の人間と、反原発運動の場で対峙しあう、また原発推進派の科学者たちと科学技術のレベルにおいて対等にわたりあう専門家として頑張る。そして最後に、住民や被害者の人間としての論理と、専門性との接点を考えていく。トリレンマの真只中に身を置こうというのである」(pp. 277-278)。

トリレンマの構造を把握したとて、そこから新たな科学者像を編みあげることが容易ではない。吉岡も、「トリレンマの状況をかかえた現代科学を、人間解放の科学へと変えていく作業は、そのおおまかなプログラムはおろか、具体的目標さえ明示できない、非常に漠然としたものである」(p. 280)とし、理論的整理をさらに推し進めるというアプローチの存在を示唆する。しかし、これを拒否し、矛盾の吹きだまりにとどまる高木を、吉岡は極めて高く評価する。「…職業科学者や大学人が身を置いているような安全地帯とはおよそ正反対のところで、ぎりぎりの闘いをつづけるという姿勢は、必然性のあるものである。科学技術をめぐるトリレンマを、具体的な個々の実践の場において、その都度解決していくことによってのみ、生活の糧をうることができる、という極限状況に、みずからを追い込むことによって、科学の変革への手がかりをつかもうとする高木の姿勢は、観照的立場からの科学批判と対極に立つものと言える」(pp. 279-280)。「人間同士が直接ぶつかりあい傷つけあうような実践から切り離された理論が、まっとうな知のありかたではないと高木は考えるのである。観照的立場から科学の党派性についての理論を構築するというアプローチを積極的に棄て去った高木は、現代科学の荒々しい未分化なトリレンマ状況の中に直接身をおくことを選び取ったのである。それは正攻法であると思う」(p. 280)。

本書の結びとなる段落は、高木へのエールでもあっただろう。少々長いですが、全文を引用したい。「しかし正攻法をとることは反面、厳しい選択でもある。花崎昇[皋]平は『生きる哲学の場——共感からの



出発』のなかで“根拠地の思想”を提唱した。たとえ規模は小さくとも、政治、経済、生活、文化の諸次元を縦断する総合的な人と人との関係の場——それを『根拠地』と名づける——の形成をめざす。そして、その根拠地に共同の経験を蓄積し、そこを、共に生き共に死ぬ共同の理念を追求する場とする、と花崎は述べる。しかし高木は、この根拠地——共同実践による共同認識の基本的ユニットと見なしうる——の思想に共感しつつも、根拠地のなかで新しい<知>の創造を目指すのではなく、そこから一步離れたところに、みずからの居場所を定めようとする。専門家の立場と生活者の立場とを仲立ちする工作者として、一切の矛盾を背負い込もうとするのである。この高木の『矛盾の前線に身を置く内在的批判の徹底』という方法論は、科学者が変わるメカニズムを正しく捉えているように思われる。何らかの根拠地に到達した瞬間、科学者は生活者となってしまうからである。さまざまの根拠地に旅人として接触しつづけるものの、生活者と同化せず、またもちろん科学者ないし学者の共同体にも忠誠を誓わない異邦人としての生き方を、高木は選んだのである。高木の工作者としての実践が、どこまで行きつくことができるかは疑問である。しかしその成否にかかわらず、人間としての全存在を賭けた“実践”——高木は実験という言葉をしばしば使うが、正しくは実践と呼ぶべきである——であるからには、それは新しい科学者像を生み出そうとする先駆的な試みとして、人間解放のための実践に、優れた見本例を提供するであろうことだけは疑いえない。ひとりの工作者として矛盾の前線に身を置く高木の“実験”が、これからどのように進められるのか、見守っていききたい」(pp. 281-282)。「科学者は変わるか」というモチーフに触れているのは、本書全体において、ただこの一箇所のみである<sup>12</sup>。

高木の姿から——また、こうした吉岡の筆致から——科学批判の実践について何を感じ、何を学びとるかは、むろん人により様々であろう。吉岡自身はどうであったか。高木の方法論を「正攻法」と述べたところで吉岡は、自らの専門である科学社会学もまた理論的学問の党派性——ディシプリンとしての理論的学問は特殊な知的・制度的性格を持っている——を有していると指摘したうえで、述べる。「現代社会のなかでの科学のダイナミックスを、外側から冷静に捉えるうえで、科学社会学は有力な手段となることができる。しかし科学社会学の概念装置で、人間解放の科学について語ることは根本的なルール違反のように思われる。とはいえそれが人間解放の科学をじっさいに作り出すための実践と、まったく無縁であると決めつけることもできない。だがいずれにせよ、両者の関わりあい、屈折したものとならざるを得ないだろう」(p. 281)。

吉岡は結局、この「屈折」を引き受けていったようにも思われる<sup>13</sup>。科学社会学の構想から、『通史』『新通史』に象徴される現代史の試み、原子力の社会史の記述、各種政府委員会委員、原子力市民委員会との関わり、と歩を進めるなかで、吉岡自身、変わったのであろう。

<sup>12</sup> なお高木は、吉岡の連載がはじまる数ヶ月前に『科学は変わる——巨大科学への批判』(東経新書、1979)を發表している。

<sup>13</sup> この点については、本日のシンポジウムで勉強させていただくなかで考えていきたい。